"Jamesian Anxiety" and the Ecomomic Resolution

– Aesthetic Development and Anxiety in Roderick Hudson –

「ジェイムズ的不安」とその経済的な回収 一『ロデリック・ハドソン』の美学的な成長と不安

秋山 義典

「ジェイムズ的不安」とその経済的な回収 一『ロデリック・ハドソン』の美学的な成長と不安

外国語共通教育センター 秋山 義典

1. 豊かな遺産とその安心感

ヘンリー・ジェイムズの小説には、米国の有閑階級がよく登場するのが特徴のひとつである。彼らは、時に貴族階級であったり、億万長者だったり、巨額の遺産を受け継ぐ女性相続人だったりと資産を豊かに使うことができるようなひとびとが登場する。『ロデリック・ハドソン』(1875)に登場するローランド・マレットは、かなり裕福な独身紳士である。絵画の愛好家であり、何年かのヨーロッパ生活を体験している。ローランドは、お金 (money)があり、暇 (time) も持ち合わせている (RH49)。そのような主人公である。それゆえに人生の不安感をおぼえるわけでなく、満たされない毎日に倦怠を感じているものである。

マサチューセッツ州のノザンプトンにいる従妹のセシリアを訪れた。ローランドが未亡人の彼女を見ると、気になることがあった。夫を亡くしたことに加えて、財産の大部分を失ったことであった。とはいえ、セシリア自身は頭のいい女性で巧みにこの逆境に対応できるすべを心得ているようだった。ローランドはセシリアに対する自分の同情は余計な心遣いであるかもしれないと内心感じている。彼女はそれなりに素晴らしい家庭をしっかり築いているという。セシリアは出費の節約には無理なことがない。だから、余計な心配はいらないはずだが、ローランドは、彼女のためになにかできないかと思い込んだりする。もしかすると彼女と結婚したいと思ったときもあった。そんな気持ちを覚えたのは、8年前だった。その一方この女性に「慈善行為(charity)」や「援助(patronage)」を申し出るのは、やりにくいし、そういうことはあり得ないと考えたりする。第1章からこのようなローランドがこ

の女性に対する姿勢が伝えらえるのであるが、この始まりが暗示しているのが、ローランドがこの女性に愛情をいだいているというよりはむしろ経済的に彼女を心配していることではないだろうか。おそらくかれが懸念することはセシリアが、その財産の大部分を失ったことであった。だから、彼女に残された遺産の元金を節約しながら、資産が減らないように運用することが必要なのかもしれないと思わせる。セシリアは次のようにローランドの人物像を説明する。

You are intelligent, you are well-informed, and your benevolence, if one may call it benevolence, would be discriminating. You are rich and unoccupied, so that it might be abundant. Therefore I say you are a man to do something on a large scale (RH51).

多くの財産を失ったセシリアからみると、ローランドは、こころが広く、 聡明で、見聞の広い男性であり、識別する能力を持った人間である。さらに お金持ちでありながら、仕事をしないでいる。その結果、有り余るほど豊か なのである。規模の大きななにかをするような人間だと思われている。一 方、ローランドは、一見お金に困ることはない、経済的に困窮することのな い生活に余裕のある日々を送っている。同時に働くことなく、生活不安のな い不労所得者のすがたがみえると言えるだろう。したがって、彼の人生には 資産の蓄えについての経済的な悩みなどとは関係がない。

ジェイムズ家の歴史をみていると、一族には学問的に深くかかわる人々に目をひかれるが、その背後にはやはり、経済的な豊かさが強調されるであろう。ヘンリー・ジェイムズの祖父ウィリアムは1789年にアイルランドから移住して、銀行業や製塩業など一代でニューヨーク州有数の資産を築きあげた。遺産の一部を相続した父ヘンリーは実業に就かずに、宗教哲学者になり、スウェーデンボルグ派の神秘思想に傾倒してその研究を深めていく。この父親は可能な限り偏見にとらわれない自由な人間に育てる教育方針を持ち、一家はヨーロッパに渡った。一か所に定住するのは教育によくないという考えかたを父親はもっていて、その教育方針で一家はイギリス、フランス、スイスの各地を転々と旅行して回った。まだ子供であったヘン

リー・ジェイムズは 12 歳から 17 歳までの感性豊かな時代をアメリカの外で過ごしたことになる。1875年にはかれが32歳のときにヨーロッパ定住を決意した。かれのヨーロッパへの意識は強かったことはよく知られるが、ヨーロッパでの体験が意味するものは何かといえば、少年時代からかれは周囲から、環境から、観察することで印象を得て、その印象を積み重さねて、さまざまな印象を束ねることによって、積み重さなった印象の形を利用しながら、小説を書くようになった。結局、作家という仕事に就くことに至ったといえるだろう。その背後になにがあるのかといえば、一家に残された遺産の豊かさがあったと思われる。そのせいか、ジェイムズ一族は祖父の大きな遺産のおかげで子供たちは何不自由なく生活できる身分になったように見える。

2. ジェイムズ家の階級アイデンティティ

ヘンリー・ジェイムズ一家の歴史を表面的ではあるが、追いかけてみると さまに豊かな遺産とその安心感がジェイムズ一家を支えているようにみえ る。最近のヘンリー・ジェイムズ自伝によれば、ジェイムズ一族は小説のよ うな有閑階級の豊かさで、不自由ない生活を送ることができたわけではな かったと見られる。一族の遺産の蓄えは、実は不安定で必ずしも確実なもの ではなかったという見方がある。実際、書簡集のなかで、ヘンリー・ジェイ ムズは、兄のウィリアムにこう語っている。自分は収入のことばかり頭にあ るのだ。少なくとも収入があるように努力を惜しまないようにしている。悲 しいかな、収入を上げるための元々の才能に恵まれていないのであると告白 している。一家の資産が大きく減ってしまったことにヘンリーは気がついて いた。芸術家の人生は必ずしもおとぎ話の展開通りとはいかないものであ り、芸術に傾倒する活動が必ずしも名声と富に結び付くわけでない。そうし た考えに目覚めたヘンリー・ジェイムズはだんだんと自己の生活についてあ れこれ考えるようになり、その人生の不安感を感じ始めるようになったとい われている。ヘンリー・ジェイムズら息子たちは、偉大なる父親が築きあげ たライフスタイルによって不労所得と富の枯渇という不安をいだき、それは 精神的にも物理的にも根源的な意識であり、かれらは自分たちが成長するた

めに必要な資金展開のありかたについて悩んでいたといわれる。

父親は遺産を増やそうとして資産を運用するようなことは意図的にしな かったようである。その代わりに、子供たちの教育の遺産になるようにお金 を使っていたと思われる。これは、利益を上げて資産を増やすというより、 二人の息子に対する将来の成長に向けた投資にたとえることができるかもし れない。たとえば、ヘンリー・ジェイムズは父親の遺言書に抵抗して、1836 年12月30日に不動産全体をもらい、加えて債券、現金など合わせて3万 ドルを相続した。1845年には裁判所の命令でシラキューズの不動産の分割 で8万ドルの割り当てが彼に与えられた。併せて11万ドルの遺産を自分の ものにしたヘンリーは、その結果、年間1万2千500ドルの収入を得たとい う。とはいえ、いつまでも、ヘンリー・ジェイムズ自身が、大学も中退して、 思うような仕事も見つけられないまま、自分で収入を得られない状態で、つ まりは不労所得者として幼年期のように人生の後半も豊かな生活を送ること ができるのであろうか。それは遺産は永久に続けられていくものではなく、 やがて資産はなくなっていくということについての将来的な不安感を暗示 している。それは、おそらく「ジェイムズ的な不安」という現象といえるし、 一見裕福に人生をおくっているようにみえるかもしれないが、自己の成長や 展開に不可欠である資産に対して経済的な不安をどこかで否定することがで きない。そういう状況に近いかもしれない。

3.『ロデリック・ハドソン』、無生産の不安感

『ロデリック・ハドソン』の独身紳士には「ジェイムズ的不安」とは関係がないのだろうか。ローランドは、お金に困ることはない、不労所得者であると指摘したが、それは同時にかれが社会の中でみずから資産を作り上げる存在ではないということにもなる。芸術を愛する人間でありながら、自分は芸術を創造するのではなく、平凡な存在であり、決してみずからは芸術家になれない人物でもある。ヘンリー・ジェイムズが描写する、おそらくロデリックの成長に大きな喜びを感じるはずの人物がローランド・マレットであろう。ジェイムズの作家としての頭のなかでローランド・マレットは、様々な悩みや不安感から解放される幸運な存在でありつづけるであろう。

He was an awkward mixture of moral and aesthetic curiosity, and yet he would have made an ineffective reformer and an indifferent artist···As it was, he could only buy pictures and not paint them; and in the way of action he had to content himself with making a rule to render scrupulous justice to fine strokes of behavior in others. On the whole, he had an incorruptible modesty (RH58).

ローランドは、道徳的で美的な好奇心が奇妙に混ざり合っている人間で、改革するには無力であり、芸術家としては平凡な人物である…. 実際はかれにできることは、絵画を購入することがせいぜいで、自分で絵を描くことは不可能だったし、行動の点では、他人のちゃんとした行動に細心な判断を下すことで満足しなければならない程度で、全体では高潔な慎み深さを持ち続けている人間なのである。

そんな芸術を愛するが、自分は芸術家になれないローランドは、セシリアから法律事務所で働く地元の芸術家の卵であるロデリック・ハドソンを紹介される。ロデリックの作る未来の作品に資産を投資したいと感じる。 2年間、イタリアで美の体験ができるように資金を提供する。

For a moment she was silent again. 'You are very generous,' she said, almost solemnly.

No, I am simply very shrewd. Roderick will repay me. It's a speculation. At first, I think,' he added shortly afterwards (RH98).

ハドソン一家の従妹のメアリー・ガーランドと会話の中で、ローランドは、大変気前のよい人物だから、ロデリック・ハドソンの経済的な援助を買って出るのだろうと言われるが、それは違っているという。私の批評眼は、節穴ではないと強調して、ロデリック・ハドソンへの投資は利益を生み出すであろうと話す。repayとは重要な意味を暗示する。ロデリックがローランドに精神的に芸術家として成長して報いるであろうという期待を表していると同時に経済的な返済をもくろんでいる。さらにspeculationとは資産の投機ある

いは投資を表している。それはローランドがロデリックの芸術的展開への期待を見越しているともいえる。それは、ロデリックの成長のための投資であるとロデリックに大きな期待を寄せる。

4. クリスティーナの価値を高める母親

二人の男たちがローマに戻ると、クリスティーナ・ライトがロデリックの 仕事場に入ってきた。クリスティーナは、アメリカ国籍の画家と結婚したラ イト夫人の一人娘で、ヨーロッパで野心的な母親の影響を受けている。幼い 時から大切に養育されて、複数の外国語を操り、何百冊のフランス小説を読 破した女性と言われる。制作にたいする自信を失いつつあった芸術家として 不安に襲われたロデリックは、彼女の怪しい魅力に引き付けられてしまう。 かれは恋のとりこになり、正気を失う。早速、ロデリックは、彼女の胸像を 作製させてほしいと母親のライト夫人に頼み込む。経済的に貧しいロデリッ クであったが、胸像の製作で何度もあっているうちに、クリスティーナとの 交際を進行させている。ところが、ライト夫人は、クリスティーナを財産と 爵位を持った男性に嫁がせたいとひそかに念願している。

I had been blind, I had been insane: she was a creature in ten millions, she was to be a beauty of beauties, a priceless treasure!...I had a passionate belief that she might marry absolutely whom she chose, that she might be a princess out and out. I have never given it up, and I can assure you that it has sustained me in many embarrassments. Financial, some of them; I don't mind confessing it! I have raised money on that girl's face!(RH209)

ライト夫人は、クリスティーナの養育を振り返りながら、自分の娘の美しさにすっかり目がくらんで気が変になったくらいでしたと、ローランドに話す。娘は何千万の価値のある女性であり、美女の中の美女、「無限の価値(a priceless treasure)」の宝物のような存在であり続けるという。自分で選んだ人と結婚し、最上のプリンセスになるであろうと熱狂的な信念を持っているとしながらも、数多くの恥ずかしいような出来事があった。お金に関する悩

みを抱えたライト夫人を支えてくれたのが、クリスティーナの存在があったと告白する。娘の顔の美しさを利用してお金を集めたこともあったほどであった。いわば、ライト夫人はクリスティーナの価値は最高の高値をつけてくれる男性に売り渡すために、娘に投資する野心にあふれている。母親はこの娘を都合よく利用している。そういう風に暗示されている。「私は娘の顔をつかってお金集めをしてきたのです。」「ジェイムズ的な不安」の視点から見ると、クリスティーナの価値を高めることで、彼女に投資をすることによって、彼女の存在が多くの利益を生み出す期待を高めているのだと読み取ることができるだろう。一見、娘と母親の親子関係は資金投資の経済問題とは関係なさそうに思えるが、投資に意欲的なライト夫人にも、娘の価値を意識しないわけにいかない。こうした母親の言説にも「ジェイムズ的」な資産の危機感が見て取れると思われる。

5. ヘンリー・ジェイムズの父親の教え

ヘンリー・ジェイムズは、自叙伝『Notes of a Son and Brother』(1913)のなかで、投資のあり方を述べている。父親から財産を金銭的な利益を生み出すような投資を行うのではなくて、様々な接触、印象、体験を「美徳」もしくは「社会的な名誉や価値観」に変わるように資産を転換することが大切であるという教えを身をもって忘れてはいけないのである。言い換えると資産を有効に運用するということは、経済的な関係を美的な体験、印象に転換させることであり、あるいは反対に美的な体験や印象を経済的な利益に変換することが求められるのであるという考え方であった。**1「経験」を多く重ねることで人生の具体的な利益を上げていく。その結果、遺産の蓄えを倹約的に節約することにつながる。それが社会投資を作り上げる。おそらくそういう経済的な考えを抱いていたと思われる。

きっかけになった出来事として、1857年の春ニューヨーク株式市場での株価急落があった。この事件でジェイムズ家の資産は大きく失われた。アンドリュー・ローソンの19世紀半ばのアメリカ社会の不安とリアリズム小説との関係を論じた論文では、1857年の恐慌が経済社会に与えた心理的な要因について焦点を当てている。*257年恐慌の最初の明白な兆候は、8月下旬

にオハイオ生命保険と信託会社の失敗であった。金融機関は、500万ドルを 鉄道建設業者に貸与しており、東部の銀行家に巨額の借金を支払うことがで きず、オハイオ州の生命は破産に追い込まれた。加えて、銀行が金の支払い を中断し、株が急落し、ニューヨーク市の証券会社の半分を含む何千もの企 業が倒産。新聞社のオフィスの外では掲示板の周りで混雑した銀行や失敗 した事業の報道記事を読むために多くの人々が集まった。フィラデルフィア や他のアメリカの都市の銀行もまもなく資金の支払いを中断。金融信用の 崩壊は、建物や鉄道の建設を停止させて、国内の貿易量を減少させた。北東 部と中西部で急増した失業率は、10月下旬までに、マンハッタンとブルック リンにおよそ10万人の失業者を生んだと見られている。ローソンは、こう した社会構造の不安定が当時のリアリズムといわれた小説の展開にネガティ ブな心理的な影響をもたらしているのではないかとみている。米国経済が順 調に成長していた時期であったが、特に経済的な不安感によって先の見えな い錯そうした社会混乱に人々は現代的消費の矛盾に直面した。市場ではさま ざまな商品や多くの人々が混乱して、情報が錯そうすることによってこれま で順調に発展してきた社会には不安感が再び覆いつくした。そうした経済的 不安が 1875 年以前から書き始められたジェイムズ『ロデリック・ハドソン』 の登場人物の形成に精神的な影響を少なからず及ぼしている可能性に言及す る。具体的には 1857 年恐慌は、ニューヨーク市場の大混乱により、ジェイ ムズ家の資産を大きく減らすことになり、一族はこの資産の価値が低下する ことで、資産に関する不安と懸念を払しょくするのが難しくなり、父親は借 金をする必要性に迫られたといわれている。もともと一家は元来ある資産を 減らさずに維持することが家訓として伝えられていた。ジェイムズの書簡を 調べてみると、ジェイムズ自身が資産に関して失望感を抑えることに苦心し たと手紙の書き直しの中に残されている。

この急落の結果、父親は資産の運用と低下についての危機感を強く覚えることになった。、父親は家族の資産の低下を反省した。そこで投資の考え方を見直してうまく利益を生みだす仕組みへと資産を維持するために方向転換しようと試みた。これを「ジェイムズ的不安」とたとえるとすれば、その不安感を回収するような経済の働きが登場することになるであろう。それは、新しい利益を生み出す「投資」の登場になるのではないだろうか。たとえば、

資産は外国への教育活動に一部はむけられることになった。1860年には家族はドイツのボンに引っ越している。兄のウィリアムがドイツ語を学ぶことになった。大西洋を行き来しながら、ジェイムズは様々な体験を重ねて、ヨーロッパの「印象 | を集めていくきっかけになった。*3

一方、小説の中では、ロデリックの母親が反対しているにもかかわらず、『ロデリック・ハドソン』でローランドが盛んにロデリックにイタリア旅行を勧めているのも、外国体験という投資を通して芸術家としての成長を期待している動きとして読むことができるだろう。父親の主張していた、転換の投資である。それは、「ジェイムズ的不安」を転換させる行為に関連しているように読むことができるだろう。

6. ヨーロッパの「印象」を集める

ローランドは、ロデリックと同行させて気分の赴くままにスイスとドイツをぶらぶらと歩きまわった。資金が少なくなれば、ローマに戻ってそのイタリアの雰囲気に再度、味わう。ふたりは馬車に揺られながら、涼しい空気を吸い込み、泉の流れる水音や牛の群れの鳴らす鈴の音に耳を傾けたりした。二人の乗合馬車は、イタリアとスイスの山脈を超えた。ローランドは、ロデリックの母親に芸術家とはどういうものかを語る。

Every artist needed to knock about and look at things for himself (RH132).

芸術家とはだれでも、機会をとらえて、歩き回りながら自分でものをみる必要があると手紙の中で書いている。これは様々なものをみて、その見た経験が、芸術家の価値を高めていくということにつながり、それがロデリックの成長につながるかもしれない。そういう美学的な投資に言及しているように思われる。このさまざまなものとは、具体的にはどのようなものを指しているのだろうか。まわりをみて、集めていく行為とはどういうことなのであろうか。

特にロデリックがローマに着いたときに、かれの言葉はローランドを相手 に饒舌に自分が見て感じたものが自己の精神の中に流れる水のように押しよ せてくる様子を語りつくして見せる。ローマを浮き彫りにする様々な彫像や 絵画の数々がロデリックのこころをとらえている。すっかりこころを奪われ て我を忘れているようなそのかれの様子が、「これまでにもう見すぎるほど 見てきた (have seen enough for the present:)。つまりぼくは丘の頂上に昇り つめてしまった (have reached the top of the hill)。印象の消化不良をおこし てしまい (have an indigestion of impressions)、これ以上つめこむには (before I go in for any more)、まずこれまでの印象をすっかり片付けてしまわないと いけない (must work them of) と語る。 (RH103) ローランドは、素朴な素 地しかもたないアメリカ人青年に芸術の都の空気を体験させることによって 今までのロデリックとはちがった自己成長した姿をひそかに期待している。

ローランドは「I want to look at Roderick Hudson's! (RH103)」ときっぱりとロデリックの芸術作品の期待に言及してみせる。「印象 (impression)」ということばが、ロデリックの口から発せられるとき、その表現には、なにかが表されているようにみえる。

7. ウォルター・ペーターの「印象」が暗示する流動性

『ロデリック・ハドソン』のこの場面を解釈するとき、ウォルター・ペーター『ルネサンス』(1873)の「結論」に重なり合う部分が顕著にみられるとリチャード・エルマンは指摘する。『ロデリック・ハドソン』のニューヨーク版の序文にはペーターについての言及はないが、そのかわりにバルザックを例にプロバンスの田舎町を子細に描いたように、自分はそれに対抗するようにマサチューセッツ州のノザンプトンの田舎町を小説に語っていけない理由はないはずだと書いている。エルマンによれば、バルザックを出したのは、単に読者を惑わせる手法であり、この小説の主題は、ペーターにたいする対抗言説ではないかと指摘する。**4 ペーターの美学がどうして経済的なものに無関係とはいえないのか。その点を検討してみたい。わずか5ページしかない「結論」ではペーターは自分をルネサンス期の芸術家に変容させながら、みずから芸術家を演じるような感性や思考を展開させるのだが、この結論にある「生きることの成功(success in life)は、固い宝石のような炎で(with this hard gem-like flame)絶えず燃えている恍惚状態 (To burn always, to maintain

this ecstasy) (R237) という瞬間を熱烈に賛美することで当時の詩人や小説家、若い男性を魅了したといわれるほどの文化的な影響力を持っていた。

Each object is loosed into a group of impressions — colour, odour, texture — in the mind of the observer. And if we continue to dwell in thought on this world, not of objects in the solidity with which language invests them, but of impressions, unstable, flickering, inconsistent, which burn and are extinguished with our consciousness of them, it contrasts still further: the whole scope of observation is dwarfed into the narrow chamber of the individual mind.···Every one of those impressions is the impression of the individual in his isolation, each mind keeping as solitary prisoner its own dream of a world. Analysis goes a step farther still, and assures us that those impressions of the individual mind to which, for each one of us, experience dwindles down, are in perpetual flight; that each of them is limited by time, and that is actual in it being a single moment, gone while we try to apprehend it, of which it may ever be more truly said that it has ceased to be than that it is.(R236)

それぞれの事物は一群の印象が観察するひとのこころの中でバラバラになり、色、香り、感触に解体される。もし私たちがこの世界で言語が事物に帯びさせるその堅固においてではなく、不安定で、うつろいやすく、一貫性のない印象、つまり燃え上がりはするが、それらを私たちが意識すると消え去ってしまう数々の印象によって、この世界についての反省を行うならば、その世界は実際よりもさらに縮小されて、観察の全領域は、個人の精神の中の狭い部屋のなかではじけて小さくなる。

「印象」とは複数に重ね合わせることができるようではあるが、容易に移 ろいやすく消え去るようなはかないものであるという性質をうかがい知るこ とができるだろう。経験が縮小している印象は、わたしたちの手元にあった と思うや否や、わたしたちの手元からはなれてしまう。印象とは時間によっ て制約を受けているが、また時間が無限に分析可能であるとのと同じよう に、その印象も無限に分割できるのだと思わせる。さらに印象が現実である のは、ただ一瞬にすぎないのであり、その瞬間を把握しようとすれば、それ は過ぎ去っていく。現在にあるというよりは、過去にあったというほうが真 実であろうという。

「印象」とは同時にTo burn always with this hard gem-like flame, to maintain this ecstasy, is success in life といわれるように、それは生きることにエクスタシーを保つような喜びをあたえてくれるものである。「印象」がもたらす瞬間的な熱烈な賛美が強調されている。キリスト教的道徳があたえてくれる喜びよりも、この刹那的な喜びのほうがはるかに大きな意味をもつ。同時にここには、瞬間的に、うつろいやすく、確実に保管しようとすると消え去る性質がみえてくる。絶えず変容をくりかえす日常的な風景や物の中に密やかにたたずむ瞬間的な美を知覚したり、発見したりする行為にこそ大きな喜びや高い価値が潜んでいることを暗示している。まさに瞬間的な「印象」の流れのなかで、美的なエクスタシーを浪費することなく、ため込むことで、わたしたちが「印象」を感受することが肝心な点であろう。

一方、『ロデリック・ハドソン』の次の場面を思い出すときに、ジェイムズがウォルター・ペーターの『ルネサンス』から受け取れるあるイメージが暗示されているのではないかと思われる。

What becomes of all our emotions, our impressions,' he went on after a long pause, 'all the material of thought that life pours into us at such a rate during such a memorable three months as these? There are twenty moments a week-a day, for that matter, some days- that seem supreme, twenty impressions that seem ultimate, that appear to form an intellectual era. But others come treading on their heels and sweeping them along, and they all melt like water into water and settle the question of precedence among themselves (RH105).

ロデリックは、自分たちの感情や印象がどうなるのか、忘れることがない 3 か月間、生きることが自分たちの中に流れ込んできた思考の材料すべてが どうなるのか考えようとしている。一週間の間に 20 個の素晴らしいと思える瞬間があり、究極とおもわれる 20 個の印象 (impressions) もあり、そうい

うものが知的な時代を形成しているようにみえる。しかし、別のときや別の瞬間や印象が次々やってきて、水がその中ですっかり溶け込んでいる。それらのなかで優位性という問いを設定していると語る。おそらくはローマで目にした芸術についての印象を一気にたくさん受け取っているようすを思い浮かべることは容易であるが、この部分では「印象」の特殊性あるいは瞬間に流れるようなイメージの連鎖が極めて特徴的に描かれている。同時に、「印象」とは移ろいやすいというロデリックの思考がかなり抽象的に展開しているのも感じ取れる。

8. 漂流する資産の「印象」と資本経済主義の不安

この場面で、思い浮かべるのが、ペーターの『ルネサンス』における結論 で展開した「印象 | の漂流するイメージである。ジェイムズの『ロデリック・ ハドソン』ではロデリックの成長を促す重要な要件のひとつが資産(お金) の流動性ではないだろうか。ロデリックの活動を支えることが可能なのは、 資金の不安が解消されていることが保証されているかぎりの条件である。不 安を取り除き、安定した個性を展開するためには、資金の供給は不可欠であ る。常にお金の供給をつづけることにより、人生の経済的なエネルギーが確 保される。これはある意味で人生に喜びを与えるものであると考えられるだ ろう。と同時に、大量の「印象 | の束が永久に維持されるかぎりは資本主義 の拡大とともにロデリックの成長も順調に展開される。しかし、長い歳月で 積み重ねられた資産の山も徐々に分割されると一瞬のうちに霧のように空中 に消えて見えなくなってしまうこともないわけではない。そうした刹那的な 不安が「印象 | にも「資産 | にも付きまとう。 それはしっかり保持しないと 利那的なエクスタシーとして漂流してしまう。

ロデリックが先に語っていた 独特な美意識を再度思い浮かべると「それぞれの事物は一群の印象が観察す るひとのこころの中でバラバラになり、色、香り、感触に解体される。私た ちがこの世界で言語が事物に帯びさせるその堅固においてではなく、不安定 で、うつろいやすく | 存在するものが、歴史的にジェイムズー家が心理的に 絶えず不安を解消できなかった一族の「資産」の不確実性を連想させる。そ の両者にはなにかしらの共通するものが暗示されるかもしれないと思われ

る。先に見た、かれの書簡のなかでジェイムズは父親の残した遺産の蓄えは不安定であり、将来的に確実に残るものではないと危惧していたことも思い起こす。小説の中では、ロデリックはローランドが築いた資産を「一滴も残らず使い尽くしてしまった」のであった。そして、ローランドは絶望的な不安のなかに「破産者」を宣言せざるをえなくなる。

"In God's name," Roderick cried, "don't remind me of my obligations! It's intolerable to me, and I don't believe it's pleasant to Mallet.

I know they're tremendous--I know I shall never repay them. I'm bankrupt! Do you know what that means?" (RH320)

ローランドに対して、ロデリックは「神に誓って」自分のしなければならない義務を思い起こさないでほしいと頼みこむ。自分には耐えられるものではないし、ローランドにとってもロデリックの芸術家の成長という喜びをあたえてくれるものではないという。途方もないくらいの義務に向き合ってとても自分では払いきれない。自分は破産者なのだ。それがどういう意味なのか、分からないのか。ロデリックは、相手の期待に応えられない自分の限界のような行き詰まりを嘆いている。この小説の前半では、ロデリックを豊かに成長させていたローランドによる資産の投入が、つまりロデリックに対する投資が順調におこなわれていたのだが、物語の後半には様相が変わりつつある。投資のながれが同じではなくなり、資金的に行き詰まりを見せつつある。この場面でロデリックという芸術家価値の不確実性が「ぼくは破産している(I'm bankrupt!)」という投げやりな台詞に資本主義の投資経済の行き詰まりに陥っている不安感が感じ取れるのではないだろうか。

"My dear mother," Roderick said, "if you had had eyes that were not blinded by this sad maternal vanity, you would have seen all this for yourself; you would have seen that I'm anything but prosperous." "Is it anything about money?" cried Mrs. Hudson. "Oh, do write to

"Money?" said Roderick. "I haven't a cent of money; I'm bankrupt!"

Mr.Striker!"

"Oh, Mr. Mallet, how could you let him?" asked Mrs. Hudson, terribly.

"Everything I have is at his service," said Rowland, feeling ill.

"Of course Mr. Mallet will help you, my son!" cried the poor lady, eagerly. "Oh, leave Mr. Mallet alone!" said Roderick. "I have squeezed him dry; it's not my fault, at least, if I haven't!"

"Roderick, what have you done with all your money?" his mother demanded.

"Thrown it away! It was no such great amount. I have done nothing this winter."

"You have done nothing?"

"I have done no work! Why in the world didn't you guess it and spare me all this?

Couldn't you see I was idle, distracted, dissipated?"

"Dissipated, my dear son?" Mrs. Hudson repeated. (RH323)

この場面では、ロデリックの母親に対して、彼は自分の芸術家の仕事が順 調どころではないことを見抜かれているとみている。母親は、それはお金の ことなのかと声を張り上げた。お金のことならストライカー氏に手紙を書き なさいというが、「お金だって?ぼくは一円も持っていないのです。ぼくは破 産しているんです | とロデリックは開き直って答える。それでも母親はロー ランドに向かって、この息子に資金を提供してもらえないでしょうかと激し い口調で頼みこむ。ローランドは、自分のもっているものすべてをかれには 使ってほしいと居心地悪そうに答えている。ローランドさんはおまえを助け てくださるから、と母親はかわいそうに息子のロデリックを励ますが、反対 にロデリックは、母親にローランド氏のことはほっといてほしいときっぱり と反論。ローランドはロデリックのもっているものすべてを一滴も残らず絞 りつくして使い切ってしまった(I have squeezed him dry)というと、その お金をどうしたのかと母親は正そうとするが、ロデリックはいとも簡単にそ のすべて(資産)を投げ捨ててしまったと白状する。ロデリックはなにもつ くりあげることができなかったのだ。母さん、どうしてわかってくれないの か、ほっておいてくれないか。自分が仕事もしないで、混乱して、資産を食 いつぶした (dissipated) のがわからないのか。自分には昔のようにローマの休日が自分の成長にどれほど役立った時代があったが、それと比べて、いまは何も創造することが不可能に陥っている。芸術家の成長も同じように動きが止まって見える。そのような自己の成長に絶望的な不安をおぼえている。資金の流れが停滞すると美学的投資の行き先を失うことにつながり、それは資本主義経済の成果を生み出すことに成功しない。そのように読み直すことも可能ではないだろうか。

9.「ジェイムズ的不安」を救済する美学的経済

ローソンはウォルター・ペーターの『ルネサンス』の結論とジェイムズと の関係について議論を展開している。ローソンは「ペーターのことばは、一 貫して経済的で功利主義を貫いている。…ジェイムズの初期小説や書簡、 批評などでは、ジェイムズは常にペーターの語彙を効果的に配備している。 ペーターの比喩の含蓄を吟味しつつ、さらに重要な点では、両者の経済美学 的に重なり合った意識のなかで、ペーターの長所を常に念頭においていた。 ジェイムズの初期小説や書簡の常なる主題は様々な印象を吸収しそれらを 保存したい欲求であり、なんらかの確実な生産物を生み出し、かれの父親が 投資した利益を上げて、限りある資産の原資を最大限にするのが目的であっ た | という。一見無関係に見えるジェイムズとペーターの関係を美学的、経 済的に位置付けた。1873年5月にジェイムズがペーターの『ルネサンス』の 新刊をフィレンツェで見つけたと兄のウィリアムにあてた手紙の中で書いて いる。ジェイムズはその書物には自分の全くわからないようなことがいくつ か書かれていた。だからそこに書かれたことを考えるのをあきらめてしまっ たのだが、そこで自分はここでなにかこれまでとは全くちがったものを書き 始めようと決意したのであった。1874年の数か月間、ニューヨークの週刊 誌インデペンデントにペーターの『ルネサンス』のなかのボッティチェリ論 に言及している。同時にその期間に『ロデリック・ハドソン』の執筆を進行 させていたときでもあった。

ジェイムズがウォルター・ペーターを尊敬し、その書物から大いなる着想 を得たという点はそれほど驚くような出来事とは言えないかもしれない。デ ニス・ドノヒュー『ウォルター・ペーター 不思議な魂の愛好家』(1995)には1894年7月30日に心臓発作でこの世を去ったペーターの葬儀についての記述がみられる。 $*^6$ ペーターの葬儀は8月2日にオックスフォードで行われたとき、その参列のなかにはヘンリー・ジェイムズがいないことが書かれている。しかし、このふたりの生前の交流はそれほど盛んではなかったが、参列することが期待された人物であると書かれている。それはペーターが適切な賛辞を贈ることができるような人物ではなかった。つまりはジェイムズにとって特別な存在であったという理由であった。

それではペーターの『ルネサンス』で展開される「印象」あるいはうつろいやすく、漂流するような刹那的な世界観は、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ボッティチェリたちの天才芸術家の絵画を言葉を使って優美に語りつくしている。ルネサンスという遠い過去を回想しながら、ルネサンスにおける画家、彫刻家、詩人たちの美と力強さを賞賛している。しかしながら、その精神は、遠い過去にだけに焦点を向けられたものではなく、ルネサンスの文化的な基盤が語られているが、19世紀の産業化、都市化の嵐のなかで近代商業が消費資本主義へと転換する時代を暗示するものではなかったか。アメリカでは19世紀には経済恐慌に襲われるなか、ジェイムズー家も資産の危機を切り抜けながら、ウォルター・ペーターの『ルネサンス』を読み替えることで、ヘンリー・ジェイムズには未来を予知するような経済美学の側面がみえていたのではないだろうか。

註

- ヘンリー・ジェイムズ作品
- RH *Roderick Hudson.* London:Penguin Classics, 1875, 1986. ウォルター・ペーター作品
- R—The Renaissance: Studies in Art And Poetry. The Project Gutenberg Etext of The Renaissance, 1873, 2003
- ※1 本書のジェイムズ一家の回顧録に詳しい。幼い時期から自分の一家の資産について意識を巡らしていた。James, Henry, *A Small Boy and Others* (NewYork, Charles Scriber's Sons, 1913), p.40.
- ** 2 Lawson, Andrew, Downwardly Mobile: The Changing Fortunes of American Realism (Oxford, Oxford University Press, 2014), pp.31-50.
- **3 Lawson, Andrew, "Perpetual Capital": Roderick Hudson, Aestheticism, and the Problem of Inheritance (The Henry James Review, Volume 32, Number 2, Summer 2011),pp178-191.
- ¾ 4 Ellmann, Richard, "James Amongst the Aesthetes": in Henry James and Homo-Erotic Desire (Palgrave Macmillan, 1999), pp 25-44.
- **5 Lawson, Andrew, "Perpetual Capital": Roderick Hudson, Aestheticism, and the Problem of Inheritance, p.182.
- % 6 Donoghue, Denis, Water Pater: Lover of Strange Souls (NewYork, Alfred A. Knopt, 1995), pp11-20.